書　評

平岡昭利編：離島に吹くあたらしい風. 海青社，2009年9月刊，111p.，1,667円（税別）

離島に吹く風は，戦後一貫して台風のような暴風雨であった。それも過疎化や少子高齢化といった国土縁辺地域に共通する逆風だけではなく，炭鉱閉山や造船所の閉鎖，さらには地場産業の衰退などの局地的な突風も吹いた。離島を襲う暴風雨を和らげるため，公共投資によるインフラ整備が進んだが，一時しのぎだったはずの公共投資に対して，離島は依存を深めてきた。さらに沖縄や瀬戸内海では，多くの近距離離島が本土と橋で結ばれたが，交通条件の改善は新たな人口流出を生んだ。

やることなすこと失敗だらけの離島政策に呻吟するうちに，離島の状況は待ったなしの所まで追い込まれてきた。このままでは多くの小規模離島で居住者がいなくなる「無人島化」が広がりつつある。本書の母胎となった2007年日本地理学会秋季学術大会シンポジウム『離島に吹く新しい風を捉える』は，このような危機感に基づいて開催された。このシンポジウムでは弱まることのない暴風の中にも，離島の今後を切りひらく新たな風を見いだすことを目的とした。評者はこのシンポジウムのオーガナイザーの1人であったが，予想を大きく上回る来場者数に目を疑った。そして来場者全員が同じ気持ちであったことだろう。離島という，地理学でもマイナーな研究分野にこれほど関心が集まったこと自体が，「あたらしい風」であったともいえよう。

本書は同シンポジウムの成果を一般向けにわかりやすく解説することを目的として出版された。したがって，表現や分析は学術書としてはきわめて平易である。しかしこれは編者らの研究水準が低いことを意味しているのではない。むしろ地道なフィールドワークに裏打ちされた，具体的で実現性の高い離島振興の提案が盛り込まれている。

本書は「あたらしい風」が吹く場所を人口動態から突き止めようとしている。すなわち，人口が維持されるか，あるいは増加している離島には，人口を支持する「風」が吹いているとする。このような離島の数は少ないものの，人口の流出に苦しむ離島のいわばモデルケースとなりうる。本書ではあたらしい風を，ツーリズムの風，新産業への挑戦の風，Ｉターンによる人口流入の風に分類している。本書の構成でみると，Ｉ～Ｖがツーリズム，Ⅵが新産業，ⅦがＩターンについて論じている。以下に構成を示す。

Ⅰ．インバウンド観光に揺れる国境の島－対馬（長崎県）－：助重雄久

Ⅱ．キリシタン・ツーリズムが展開する島々－五島列島（長崎県）－：松井圭介

Ⅲ．グリーン・ツーリズムの導入を模索する島－粟島（新潟県）－：山田浩久

Ⅳ．ブルー・ツーリズムの定着を図る島々－壱岐島・青島（長崎県）－：中村周作

Ⅴ．エコツーリズムの展開と住民評価－西表島（沖縄県）－：宮内久光

Ⅵ．エミュー牧場を経営する漁業の島－蓋井島（山口県）－：平岡昭利

Ⅶ．Ｉターン者が急増する南国の島－石垣島（沖縄県）－：石川雄一

Ｉのインバウンド観光は，国境の島，対馬ならではのツーリズムである。ゲストは韓国からやってくる人びとである。韓国から見た対馬の観光資源は，自然景観に加えて朝鮮通信使遺跡をはじめ

とする歴史遺産にある。韓国南部から対馬は指呼の距離にあり，釜山発の1泊2日ツアーが数多く催行される。現在政府はインバウンド観光の振興に力を入れているが，対馬はその成功例と目されている。しかし，対馬のインバウンド観光は，団体観光客を主体とする典型的なマスツーリズムであるだけではなく，社会的慣習の相違に根ざすさまざまな文化的軋轢を引き起こしている点に問題がある。筆者の助重は，両国の狭間で戸惑う対馬の旅館・ホテルの実態をつぶさに描写する。インバウンド観光は国境に位置する離島における今後の重要な振興策の1つであるだけに，対馬は貴重な先行事例である。

Ⅱのキリシタンツーリズムは宗教地理学を専門とする松井の筆になる。ひっそりと息づいていた宗教文化が，外来者の目に触れたことにより観光資源化されるプロセスを鮮やかに描き出している。そこにあるものをゲストにただ紹介するだけでは，観光資源にならない。本章では教会を訪れる方法として「ウオーク＆クルーズ」なるツアーが取り上げられ，観光資源を作り上げる鍵が，その見せ方にあることが示される。また，国内では少数派であるカトリック信者が，一種の「巡礼」として島内をめぐる行為を論じ，ゲストにとって特別な意味づけを場所に与えることが，観光地としての成立条件であることを述べている。

Ⅲ・Ⅳは島の自然環境を観光資源とした新たなツーリズムの模索を論じている。これらで取り上げる粟島・壱岐・青島は，いずれも漁業や自給的な農業を基盤とした離島であり，20世紀的なマスツーリズムからは完全に取り残された島である。これらの島で観光資源と目されたものは，住民たちの日常的な暮らしであった。粟島では郷土料理の「わっぱ煮」が，青島では磯遊びやタコ壺漁体験などのアトラクションが考案されている。しかし，グリーンツーリズムなどの体験型観光は，ホスト側の試行錯誤にもかかわらず，一定の収益を生む産業として定着していない。その一方で，筆者の山田・中村が共通して指摘するように，住民は「島のため」の観光が第一と考え，「観光のため」に島が犠牲になっては主客転倒であるという意識を抱いている。表現を変えると，住民は観光によって従来の生活がかき乱されることを懼れている。このようなツーリズムは，いわば副業的地位にとどまらざるを得ないであろう。

Ⅴのテーマは，ダイビングとマングローブ観光を中心とするエコツーリズムに対する住民の評価である。対象地域の西表島は，脆弱な自然環境に負荷をかけない，本来の意味でのエコツーリズムの日本における先進地域である。筆者の宮内はエコツーリズムに関する大規模なアンケートを実施した。エコツーリズムは島の環境保全に貢献すると考える西表出身の観光従事者と，エコツーリズムそのものが環境を破壊しているとする県外出身者を両極に，この島では多様な評価がささやかれている。それは一見エコっぽいカヌーツアーが，その実態はモーターボートでマングローブをかき分けるマスツーリズムの性格を有するからでもある。エコツーリズムの先進地域であるこの島では，エコツーリズム自体が多様に分化している。結局問題となるのは，住民が誇りとする自然環境を商品としなければ生活できないという，ツーリズムが本来的に内包するジレンマである。

Ⅶの石垣島におけるＩターンも，ツーリズムの延長線上に位置づけられよう。石垣島にＩターン者が集中する理由は，美しい自然環境だけではなく，中心都市石垣の都市的集積，既存集落の紐帯から解放された開拓集落の存在，といった本土の都市居住者が入り込みやすい条件がそろっていたことにある。青い海，緑のサンゴ礁も好きだが，コンビニやパチンコ屋のある都市的利便性も手放したくないという，いささか贅沢な移住者たちが

石垣島に集中した。彼らの中には定住指向が強く，将来の島の担い手として期待が寄せられている人びとがいる一方，筆者の石川は明示的に記述することを避けているようであるが，根無し草のようにこの島に流れ着く本土大都市出身者が，地元紙に取り上げられるほど顕在化していることも事実である。

編者の平岡が取り上げた蓋井島の事例は，本書の中で唯一ツーリズム以外の産業に関する論考である。離島はそれぞれ独自の地域的条件を有しており，農業や漁業で自立している島も少なくはない。しかし多くの離島は，第一次産業の担い手が流出し，既存産業が基盤から崩壊しているのが実情である。エミュー飼育という新分野に挑戦するこの島の成否はともかくも，限界的状況にある離島では，既存の常識を覆した取り組みが必要であることを，この事例は示している。

これらの報告から，離島にはたしかにあたらしい風が吹いているように思える。しかしそれはあまりにはかなげなそよ風で，離島の生活基盤を根底から覆そうとする暴風に抗するにはあまりにかすかである。それでもこの風に乗れば，あるいは離島が目指すべき新たな方向が見えるかも知れない。

「あたらしい風」は観光・ツーリズム方面から吹いている。しかし離島のツーリズムは既存のマスツーリズムと一線を画すべきであることが読み取れる。離島には，年間何百万人ものゲストを受け入れる余地はないし，人口1万人にも満たない離島では，たとえ1,000人の入り込み客でも大きな経済効果が期待できる。すなわち，離島では身の丈にあった規模の観光開発が必要である。そのためには巨大な観光市場ではなく，むしろ差別化され，粒のそろった消費者層を対象とすることが有効である。日本人は観光のゲストとしてはきわめて目が肥えている。このようなゲストに対しては，レディメイドではなくカスタムメイドの観光メニューをそろえる必要があるが，五島列島のキリシタン観光や西表島のエコツーリズムは，特定の属性に特化したゲストが望むとおりのアトラクションを提供している。さらにブルーツーリズム・グリーンツーリズムは，ホスト側のホスピタリティや，金銭を超えたあたたかな関係を求めるゲストの要求にも応えうる。ツーリズムが離島の生き残りにある程度の役割を果たすことが期待される。

それでも評者は，ツーリズムが離島振興の特効薬であるというつもりはさらさらない。離島の維持のためには，医療・介護・教育などのやせ細った生活基盤の立て直しと，農業・漁業・地場産業などの産業基盤の再構築，交通をはじめとするインフラの整備が必要である。例えば奄美群島の伝統産業である大島紬を，観光資源としてショウアップすることに金をつぎ込むよりも，地域経済を支える基幹産業として地道に再建する方が大切である。この風が何でも観光，何でもツーリズムの風であるとしたら，評者は乗れない。

（須山　聡）

橋本雄一編：『地理空間情報の基本と活用』古今書院，2009年7月刊，174p.，3,200円（税別）

「地理空間情報活用推進基本法（以下，NSDI法）」が2007年5月に成立し，同年8月に施行された。さらに「地理空間情報活用推進基本計画（以下，基本計画）」が，翌年の2008年に策定された。これらの法整備や計画策定は，誰もがいつでもどこでも位置や場所の情報を入手・活用できる「地理空間情報高度活用社会」の幕開けを示唆するものであろう。

本書は，このように地理空間情報をめぐる環境